

座談会 ●

東日本大震災の被災地から 2011→2021

前田伸吾・南相馬市経済部農政課長補佐／元南相馬市職労執行委員長

大崎勝弘・岩手県南広域振興局花巻農振振興センター主任主査／
岩手県職員労働組合中央執行委員長

小野寺伸浩・石巻市職員労働組合執行委員長

進行・林 鉄兵・『月刊自治研』編集長

3・11で最も被害を受けた岩手県、宮城県、福島県の各県本部の方から、この10年間の復興の現状と課題、そして組合へ期待することなど、現場からの生の声を届けていただいた。

●被災直後を振り返って

林 東日本大震災からまもなく一〇年を迎えます。私は3・11の時は、単組で支部の書記長をしていたのですが、報道を見て何かしなければとの思いに駆られ、職場の同僚とともに自治労支援チームの

第一陣として宮城県岩沼市の支援に入り、罹災証明の発行や家屋の被災状況の調査などを担当しました。発災から一カ月が経っていたにも関わらず、明日をどう生きるかという人が毎日たくさん市役所にいらつしやるという大変な状況を目の当たりにしました。

や放射能の管理、計測、公表といった未知の業務にあたりました。

現在は農政課で営農再開に注力していますが、原発事故の避難指示区域での営農再開率はわずか一〜二割と、まだ全然復興が進んでいない状況にあります。

大崎 私は岩手県職員労働組合で、委員長二年目です。非専従で、県の出先の花巻農林振興センターに所属しておりますが、被災当時は沿岸の大船渡農林振興センターで仕事をしていた関係で、海岸林や防潮林等の被災箇所の調査や、海岸付近の防災施設の復旧工事を担当したほか、震災直後は管轄区域の大船渡市と陸前高田市へ応援にも入りました。大船渡市は市役所が高台にあり、市の体制はある程度取れていましたが、陸前高田市はご存じのとおり、街がほぼ流されてしまった市役所も壊滅状態、職員も亡くなった方が多く、支援の要請すら出せる状態ではありませんでしたので、人手の足りない支援物資の搬入搬出にったり、名簿の

本日はもつとも被害の大きかった岩手、宮城、福島の被災三県のみなさんから、一〇年間の変化について伺います。

前田 南相馬市職労の前田です。震災当時は単組の書記長をしていましたが、その後、単組委員長等を経て、福島県本部浜総支部長として、原発事故で被災した単組と県本部とのつなぎ役を担当させてもらいました。執行機関の指示命令も混乱する中、職員の早期退職が大量に出るなど、非常に厳しい経験もしました。

ありがたいことに現在も他自治体からの応援をいただいています。福島県とくに浜通りの単組は人員確保とメンタルヘルスの課題に悩まされています。当時は生活保護のケースワーカーをしていました。震災当時は市内の避難所の運営や義援金の対応にあたりましたが、これが本当に大変で、市民の方からいろいろお叱りも受けましたし、身元不明のご遺体の火葬なども担当しました。その後は生活環境課に異動し、災害がれき処理

作成や駐車場の誘導など、種々雑多な業務を担いました。体制がある程度できてからは避難所運営や遺体安置所の支援など、大体一〇カ月間ぐらいい応援に入りました。

災害復旧工事における国の災害査定の仕事も担当しました。最も大きかったのは、高田松原の防潮林の工事です。地元の要望を聞きながら、県として国との調整を行いました。

小野寺 私は、震災のほんのひと月前から県本部の専従に入っており、仙台にすることが多く、震災当日は仙台市の中心部で被災しました。三日間ほど自宅にも戻れず、石巻の郊外にある病院の駐車場の中で寝泊まりしました。

石巻市は二〇〇五年に合併して市域が広がったため、職場にも被災した職員とそうでない職員があり、山の手に住む私のように水道、電気は止まったものの、大きな被害がなく普通の生活ができる職員がいる一方、何もかも失い着の身着の

ままの職員もいました。同じ庁舎で同じ業務をやらなければならないわけですが、もともと合併のせいで職員にも温度差がある中での被災でしたので、どう声を掛ければよいのか、互いの状況を聞くことすら憚られる感じがしました。

●戻らぬ住民、広がる復旧格差

林 東日本大震災の被害は未曾有の規模となりました。国は創造的復興を掲げ、被災自治体とともに復興事業に取り組みましたが、一〇年を経過した現在の進捗について教えてください。

前田 福島県は、原発で被災したかどうかが大きな分かれ道となりました。原発から二〇キロ圏内エリアの全市町避難も徐々に解除され、二〇二〇年三月に双葉町が最後の解除となりましたが、いったん流出した住民の現在の居住率はわずか一〇%未満というところもあります。

南相馬市も、ちょうど二〇一〇〜二〇一〇キロのラインが市域にかかっており、全町避